

講演録：生成 AI 時代の特許調査 ～効率と非効率の狭間で専門性を磨く～

はじめに

生成 AI による効率化の追求が自明とされる時代に、知的財産分野の第一人者である弁理士法人レクシード・テックのパートナー弁理士、角淵由英氏は、逆説的な問いを投げかける。真の専門性は、効率の追求の先にあるのではなく、むしろ「意図的な非効率の設計」と、人間ならではの根源的な「問い」を立てる営みの中にこそ見出されるのではないかと。

本講演録は、角淵氏の講演内容を単に要約するものではない。AI 活用の真の「目的」の定義、全ての価値の起点となる「問い」の重要性、そして思考を深化させる「非効率の効用」という核心的な思想を、知的財産分野のプロフェッショナルが実務で応用可能な戦略的原則として体系的に再構築することを目的とする。

1. 生成 AI 活用の 3 つの目的：何のために AI を使うのか

生成 AI の活用を巡る議論は、しばしばその目的が混同されたまま、「手法」の探求に終始しがちである。角淵氏は、この混沌とした状況に戦略的な明瞭さをもたらすため、まず「何のために AI を使うのか」という目的を明確に定義することが不可欠だと説く。氏が提示する 3 つの目的を理解することは、専門家が AI を単なるツール利用者に留まらず、自らの価値を最大化するための強力なパートナーとして位置づけるための第一歩となる。

1.1 業務の「効率化」

最も直感的で一般的な目的であり、既存の業務をより迅速かつ高品質に実行することを指す。メール返信や議事録作成といった定型タスクの自動化により、専門家は時

間という最も貴重なリソースを創出し、より付加価値の高い業務に集中することが可能となる。

1.2 専門業務の「裾野拡大」

従来、高度な専門知識がなければ困難だった業務を、より多くの人が実施可能にすることも AI の重要な役割である。例えば、サーチャーや弁理士でなければ難しかった特許調査を、技術者が簡易的に行えるようになるケースがこれにあたる。専門知へのアクセスが民主化され、組織全体の知財リテラシー向上に貢献する。

1.3 プロフェッショナルの「専門性の深化」

角淵氏が専門家にとって最も重要だと強調するのがこの目的である。AI を駆使することで、時間や労力の制約から従来は不可能だった、より高度で複雑な業務を遂行し、自らの専門性をさらに研ぎ澄ませていくアプローチを指す。AI によって生み出された時間と能力を、より創造的で付加価値の高い思考プロセスに再投資することで、専門家はその価値を飛躍的に高めることができる。

この「専門性の深化」を達成するためには、単にツールを導入するだけでは不十分である。AI という強力な道具を真に使いこなす前提として、解決すべき課題そのものを深く洞察し、的確な「問い」を立てるという、より根源的な思考法が求められるのである。

2. 特許調査の本質:「問い」を立てる重要性

AI は与えられた指示を実行する強力なツールであるが、その真価は、解決すべき「問い」が明確であって初めて発揮される。角淵氏は、知的財産実務、特に特許調査において、質の高い「問い」を立てることが全ての出発点であると強調する。このプロセスが戦略的に重要なのは、それが業務の方向性を決定づけるだけでなく、専門家としての価値そのものを定義するからに他ならない。

特許調査は「手段」であり、「目的」ではない

角淵氏が繰り返し述べる核心的なメッセージは、「特許調査は目的ではなく、あくまで手段である」という点だ。クライアントが真に解決したい課題は、調査報告書そのものではなく、その先にあるビジネス上のゴールである。専門家は、この本質を見誤ってはならない。

クライアントの言葉の裏にある「真の課題」を探る

クライアントが「調査をしたい」と依頼してきた際、専門家の真の役割は、その言葉を鵜呑みにすることではない。その裏に隠された「本当に解決したいことは何か」を突き止め、解くべき「問い」へと磨き上げることが不可欠である。例えば、「先行技術調査」の依頼の裏には「質の高い特許を取得したい」という目的があり、「侵害予防調査」の背景には「事業リスクを最小化したい」という切実なニーズが存在する。この「問い」を正確に設定することこそが、専門家が提供する最大の価値の一つとなる。

良質な「問い」が定まれば、AI はそれを解決するための強力な武器となる。しかし、その実行プロセスにおいても、AI による効率化は思わぬ落とし穴を生む。そして逆説的にも、一見無駄に見えるプロセスの中にこそ、専門家の思考を深化させる鍵が隠されているのである。

3. 非効率の効用：思考を深化させる「泥臭い経験」の価値

現代のビジネスにおいて「効率化」は至上命題である。しかし角淵氏は、この自明とされる価値観に一石を投じる。一見、非効率に見えるプロセス、氏が「泥臭い経験」と呼ぶもののの中にこそ、専門家の洞察力や思考を深化させる戦略的な価値が潜んでいると指摘する。

3.1 スクリーニング業務に潜む洞察

特許調査におけるスクリーニング業務を例に考えてみよう。AI は数千件の文献から関連性の高い数十件を瞬時に絞り込むことができる。しかし、その絞り込まれた文献の価値を正しく評価するためには、人間が数百件の文献に実際に目を通すという、一見「非効率な」プロセスで得られる文脈理解が不可欠である。

多くの文献を読み込む中で、専門家は、その技術分野において「どの程度の技術水準が標準的なのか」という暗黙的な基準や、特有の「勘所」を肌感覚で形成していく。角淵氏が指摘するように、「ノイズ」や「ゴミ」のような文献を知っているからこそ、本当に価値のある「正解」となる文献を見抜く「審美眼」が養われるのである。AI が提示する「綺麗な宝物」だけを見ていては、この審美眼は育たない。

3.2 「洞察力」と「野生の勘」の源泉

この「泥臭い経験」は、レシピ通りではない状況に対応できる一流の料理人や、自動化ラインの予期せぬトラブルを解決できる熟練技術者の能力にも通じる。数多くの試行錯誤を経て蓄積された経験知こそが、深い洞察力や直観、いわば「野生の勘」の源泉となるのだ。

AI 時代において、専門家は効率化の恩恵を享受しつつも、あえて非効率なプロセスを設計することが戦略的に重要になる。この逆説的かつ本質的なアプローチ―「意図的に非効率を設計し、強さを育てる」―は、驚くべきことに、角淵氏自身の実験において AI が生成した言葉だという。AI 自身が、人間の「非効率」の価値を示唆している点は、極めて示唆に富んでいる。

AI は人間の仕事を奪うのではなく、その役割をより高度な次元へと進化させる触媒である。この新たな時代において、専門家にはどのような役割とスキルが求められるのだろうか。

4. AI 時代の専門家に求められる役割とスキル

AI が定型的なタスクを自動化する一方で、これまで以上に人間特有の高度なスキルがその価値を増していく。これまでの議論を総括し、これからの専門家が磨くべき中核的な能力を以下に整理する。

1. **思考の「拡張ツール」としての AI 活用** 専門家は AI を単なる作業代替ツールとしてではなく、自らの思考を拡張し、新たな気づきを得るための「壁打ち相手」として活用すべきである。角淵氏自身、自らの講演内容を録音し AI に分析させることで、「自分はこういうことを考えていたのか」と思考を客観視し、整理・深化させているという。AI を自己の脳の一部を拡張するツールと捉えることで、一人では到達し得なかった思考のレベルへと至ることが可能になる。
2. **揺るぎない基礎力:「読み書きそろばん」の再定義** AI を効果的に使いこなす大前提として、実務の根底にあるロジックを言語化(形式知化)し、AI の出力を批判的に評価できる基礎的な能力が不可欠である。この AI 時代の「読み書きそろばん」をいかにして習得するかについて、島津製作所の阿紅氏が実践する教育手法は、極めて重要な示唆を与える。それは、若手担当者に「AI の出したアウトプットを、なぜそうなるのか上司に説明させる」というものだ。説明するプロセスで本人の理解度が可視化され、上司は瞬時にその理解の穴を見抜くことができる。この方法は、AI による自動化の恩恵を受けつつも、思考の

ブラックボックス化を防ぎ、本質的な基礎力を鍛えるための優れた実務的フレームワークと言える。

3. **責任ある判断と「問い」の創造** AIは驚異的な能力を発揮するが、決して「責任」は取らない。最終的な意思決定と、その結果に対する全責任は、人間が担わなければならない。そして、AIにはできない、人間が担うべき最も価値のある役割とは、「鋭い問い」を創造することである。角淵氏によれば、その問いは論理的思考だけから生まれるのではない。「こうあるべきだ」という強い意志や、現状に対する「違和感」や「怒り」といった、AIには持ち得ない強い感情からこそ、ビジネスを前進させる真に価値ある問いが生まれるのだ。

結び: 知的好奇心を未来へのコンパスとして

本講演を通じて角淵氏が伝えたかった核心的なメッセージは、「AIを単なる効率化の道具としてではなく、自らの専門性を深化させ、思考力を鍛えるための触媒として捉えるべき」という点に集約される。効率化によって生まれた時間を、非効率だが思考を深める「泥臭い経験」に再投資し、AIを思考の拡張ツールとして活用することで、専門家は新たな価値創造の担い手となることができる。

氏が敬愛するアーティスト「ずっと真夜中でいいのに。」のボーカルが語ったという「当たり前とされるものに疑問を抱くことが楽しくなるような時代」という言葉は、現代を生きる我々にとって示唆に富んでいる。AIが次々と「正解らしきもの」を提示する時代だからこそ、子供の頃に誰もが持っていた「知らないことを知りたい」という根源的な知的好奇心こそが、我々専門家が進むべき道を照らす最も重要な羅針盤となるだろう。